（抄録）

研究課題名：オリンピアンにとってのオリンピアード

―ロサンゼルス五輪（1932）からベルリン五輪（1936）に向かう競泳選手たちの経験―

研究代表者名：尾川　翔大

本研究が目指しているのは、1932 年のロサンゼルスオリンピックに出場してメダリストになった 14 名のオリンピアンが、その 4 年後の 1936 年のベルリンオリンピックに至るまでの 4 年間を辿ることを通じて、日本でオリンピックが社会的関心を集める 1930 年代のオリンピック大会に固有な時空間に身を置く選手の経験を考察することである。

この課題に取り組むにあたり、まずは、14 名の内の 1 人である清川正二を取り上げた。清川正二は、1932 年のロサンゼルスオリンピックの 100M 背泳ぎで金メダルを獲得した。そして、4 年後のベルリンオリンピックでも同じ種目で再び金メダルを獲得することを目指した。結果的に、清川は、ベルリンオリンピックの 100M 背泳ぎで銅メダルを獲得することになる。本研究は、ロサンゼルスオリンピックからベルリンオリンピックで再び金メダルを獲得することを目指した清川正二にとっての 4 年間の経験を論じるものである。

ロサンゼルスオリンピックから帰国したメダリストたちは、国内大会への参加を通して歓迎を受けた。1932 年の大会では、批判的な見解はほとんどなされなかった。しかし、1933 年以降からは、メダリストに対して大きな期待がかけられるようになった。個々のメダリストの状態については、大会前から話題に挙がり、大会後には過去の記録に基づいて評価される。記録が良くなければ、不調とみなされる。大会に出場していなくても、記録の参照点として持ち出される。有望な選手が台頭すれば、古参と位置づけられて比較される。そうした評価を、清川自身は目にしていたのである。

4 年のサイクルの終わりは、オリンピックに価値を置く人たちを再び 4 年のサイクルに組み入れ、そうした認識を強化することになる。こうした状況下で清川は、水連の戦略や社会の眼差しの狭間のなかで「メダリスト」としてオリンピアードを過ごしたのである。この 4 年間の経験は清川にとって評価され続けることであるとともに、オリンピックが 4 年に 1 度という認識を強化するものであったと考えられる。